

## V. Woolf の見た Defoe の小説について

安 田 善 重

### I

小説作家としての Defoe について多くの批評家及び伝記作家がいろいろな価値評価を下している。その中の代表的な批評家である Leslie Stephen は Defoe を a reporter minus the veracity<sup>(1)</sup> と見做し彼の作品を history minus the facts<sup>(2)</sup> と断じて、殆んど sentiment と psychology とに無関係であると可成り冷やかな態度で取扱つている。しかし一方で、Arnold Kettle はもし the proper study of mankind か man であると考えれば Defoe の小説はまさにこのような研究の中で、最初のそして最も優れたものに入る<sup>(3)</sup>と述べて彼の小説の中にかくれている vitality と interest に極めて好意的な目を注いでいるようである。この Kettle の場合と同様に、Defoe の小説、わけても、'Robinson Crusoe', 'Moll Flanders', 及び 'Roxana' の三作品に特別の関心を示したのは Virginia Woolf であつた。

Woolf は The Common Reader (1st Series) において、Moll Flanders と Roxana の小説をとりあげて Defoe 論を展開し、引きつづいて、The Common Reader (2nd Series) を著して、Robinson Crusoe に新しい意味を見出している。その他、Defoe の伝記を書いている Brian Fitzgerald, 'The Rise of the Novel' の著者 Ian Watt, 或は Peter Quennell<sup>(4)</sup> などは Defoe に同情的で、彼を単なる fact の reporter としてではなく、小説作家と認めて作品をつぶさに分析し、色々な新しい解釈を試みている。特に The Rise of the Novel は 18 世紀の realism の特質、小説と読者層との関係、Crusoe と Individualism との問題、及び Moll

Flanders の分析等、数多くの優れた研究を含み、示唆に富む卓見を我々に与えている。

さて、私はこの小論において、主として Woolf が考えている Defoe の小説の問題点を指摘し、Woolf がどの点に最も関心と共鳴を寄せているかを、実際に Defoe の作品にあてはめて考えてみたいと思う。

### II

先づ、Woolf は 'The Common Reader' の First Series において 'Moll Flanders' と 'Roxana' の作品が 'Robinson Crusoe' の名声におされて、正当な評価が与えられていない<sup>(5)</sup>と不満を述べ、更に 'On any monument worthy of the name of Moll Flanders and Roxana, at least, should be carved as deeply as the name of Defoe. They stand among the few English novels which we can indisputably great.'<sup>(6)</sup> とさえ主張している。一体、Woolf はこの二作品のどの点に greatness を認めようとしているのであろうか。

Woolf は先づ第一に、Defoe が小説を書くに至つた経緯とその小説の方法に注目している。Defoe が小説に筆をそめたのは晩年の 60 才頃であつた。それ以前は、商人として手広くメリヤス業を営み、後に煉瓦商人として活躍していた。しかし商売に失敗するや、政治問題に興味を持ちはじめ、持前の進取の気質と豊かな知識とをもつて働き、William 3 世の知遇を受けた。

彼はその知遇に答えるためにも又自己の主義主張に生きるためにも、全身を打ち込んで政治活動に従事し、英国社会の動揺と変改の時代を縦横無尽に生き抜いたのである。そ

の間、彼はいろいろな著作を出版し、時には政治上の問題、又時には、宗教上の問題などで物議をかもし、Newgate に投獄される不運な経験を味わっている。そしてこのNewgate における苦しい七年間に同居した数多くの囚人の身の上話を聞き、又 'The Review' 紙の発行を思いつたと言われる。彼はNewgate 出所後、1704年に 'The Review' 紙を発行し、政治、経済、宗教、教育及び、一般社会の問題を決して自己の思想を曲げることなく論じ、政治家だけでなく世間一般の人々の啓蒙に指導的な役割を果たした。Defoe は1712年1月5日号の同紙上で真実と自由の擁護のために事実をまげることにはしないと表明し自己の principle に忠実であろうとした。

例えば同紙で、

'... I profess to know nothing of it further than [that] truth makes any man bold.. Truth inspires nature, and as in defense of truth no honest man can be a coward, so no man of sense can be bold when he is in the wrong. He that is honest must be brave, and it is my opinion that a coward cannot be an honest man. In defense of truth, I think I could dare to die, .... Truth makes a man of courage, and guilt makes that man of courage a coward..<sup>(7)</sup>

と述べているように journalistとしての Defoe の誇り高い決意と自負がうかがえよう。彼は飽くまで事実をあるがままに報道し当時の最も influential な政治家である Harley のために強力な assistant として働いた。しかし間もなく政治家 Harley の天下も傾きはじめ、Defoe から Swift へとゆりかえられると、Defoe の高遠な理想も地に落ち、<sup>(8)</sup> 彼は政治活動の空虚さを身に沁みて

味わう結果に終つた。彼はその時の偽わらざる気持を次のように告白している。

'I have seen the bottom of all parties, the bottom of all their pretences, and the bottom of all their sincerity, and as the Preacher said, that all was vanity and vexation of spirit, so I say of these: all is a mere show, outside, and abominable hypocrisy, of every party, in every age, under every government, in every turn of government,...

(9)

このように政治活動に幻滅の悲哀を感じた Defoe は政治からきつぱり足を洗い、彼にとつて第二の人生である小説の世界へと、生来の真実を伝える透徹した観察力をもつて没入していつたのである。そしてこれは小説の世界で自己の生きた世界を再現しようとする彼の願いに外ならなかつた。勿論、家庭の経済上の理由によるとも考えられるが、'The Review' 紙を介して得た幾多の読者 - しかも、feudal な、そして aristocratic な世界から bourgeois の世界へ移り変わる新しい世界のにない手である middle class の読者 - を失いたくない気持からこの世界へ入つていつたとも推察される。実際に、前にも述べたように彼は 'The Review' 紙上で政治は言うまでもなく経済、宗教、道徳、教育、その他一般家庭における悩み事等に至るまで全般的な問題を取り上げて、現代の新聞に見られる「人生案内」的な指導も行つていたのである。1712年12月19日号では「愛情」と「喫煙」の問題を取り上げたり<sup>(10)</sup>、1706年6月20日号では「演劇と観衆」の問題を論じ、<sup>(11)</sup> 1709年8月30日号では「虐待された人妻の訴え」を問題にし<sup>(12)</sup>、又1705年2月3日号においては「Brides への忠告」をテーマにして世論の喚起を求めている。<sup>(13)</sup> このような多様な問題

に対して Defoe は誠実な論評を加えたために、当然読者は非常な興味と共感をもつて購読したといつても決して間違いではないであろう。この 'The Review' がたとえ隔日発行（正確には月、木、土曜日の週三回発行）であつたにせよ、この新聞の次に発行された同じ傾向の新聞、例えば 'The Spectator'、'The Tatler' 及び 'The Guardian' などが僅か 2、3 年しか続かなかつたのに比し 9 年間も続いた<sup>14)</sup> という事実がいかに多くの愛読者に迎えられ、愛されたかを極めて雄辯に物語つていと思う。Defoe はこの新聞の取材から編集、販売に至るまで殆んど一人で行い、たえず読者の声に耳を傾けて、自己の信ずる最も適切な助言を与えて来た。Defoe には人間以上の粘り強い意志と上昇気運にあつた中流階級の不屈の自負心があつたからこそこうした画期的な仕事が可能であつたのである。そして自己と読者との間に生れた強靱なきずなを失うことなく、小説という虚構の世界で、環境の如何を問わず生きぬく信念と勇気を読者に語ろうとしたのであろう。彼の作品に登場する人物に仮託された不屈の意志を見ればこのことが容易に理解される。これは Defoe の持つ最も人間的な要素であり、冷厳な現実に対する烈しい反骨精神であり、又同時に失意のふちからは上ろうとする強固な生命力の表出でもある。

Woolf が 1712 年 1 月 5 日の 'The Review' 紙に述べられた Defoe の述懐の言葉

'No man has tasted differing fortunes more, and thirteen times I have been rich and poor,'<sup>15)</sup>  
に注目し、更に続けて

'Facts had been drilled into him by sixty years of varying fortunes before he turned his experience to account in fiction.'<sup>16)</sup>  
と説明しているのは Defoe の浮き沈みのほ

げしかつた過去と、人生の表裏を知りつくした貴重な体験とが彼の小説の唯一の素材であり、支えとなつてゐることを述べたものと解される。Defoe の肉体には minute observation によつてえた過去の事実がしみ込んでいるのである。Defoe の小説に登場する hero 及び heroine はすべてその性格が類似し、社会の底辺に生きる雑草のような根強い生命力をもつてゐるのは彼が例の Newgate に入獄した際、皮肉にも知り合つた thieves, pirates, highwaymen, rogues, imposters 等の悲惨な身の上話を聞き、social environment にもあそはれる人間の存在をつぶさに考え直してみた結果によるのである。Defoe は彼らの生き方と自己の生き方とをないまぜて、事実を求める読者の嗜好を考慮した上で Crusoe, Colonel Jack, Captain Singleton, Moll Flanders, Lady Roxana などの人物を創り出した。したがつて圍繞せる非情で冷厳な環境の中で人間は一体何を目標にして、どういふ方法で生きるべきかを読者に語ろうとしたと考えてよいと思う。

### III

Woolf は Defoe の小説の欠点と考えられている structure 或は plot には殆んどふれていない。彼女にとつて plot より登場人物の性格の方が大きな魅力となつてゐるようである。彼女は特に Robinson Crusoe, Moll Flanders 及び Roxana の性格と、それらが置かれてゐる特異な situation に相当の興味を抱いてゐる。中でも Crusoe が 28 年も生きる孤島の situation に対する Defoe の創意的 imagination 或は heroines (Moll Flanders と Lady Roxana) の生きる surroundings に対する働きかけと考え方についての Defoe の態度に必要以上の注意を払つてゐる。又、Defoe の situation の設定とその描写についての、い

わば、無技巧の技巧という点で小説家としての Defoe のよさを認めているようである。Woolf は Defoe の小説の登場人物とそのおかれた situation に注目して次のように述べている。

'In the first pages of each of his great novels he reduces his hero or heroine to such a state of unfriended misery that their existence must be a continued struggle, and their survival at all the result of luck and their own exertions.'<sup>(17)</sup>

そして更に

'Each of these boys and girls has the world to begin and the battle to fight for himself.'<sup>(18)</sup>

と続けている。たしかに、この situationこそ Defoe の小説に共通したものである。当時の middle class の読者はこのような situation に置かれたことは先づなかつたであろう。Defoe はこのことをよく計算に入れ、読者の taste をさそうようにこの situation を設定したのである。Crusoe は孤島という大自然の中に唯一人投げ出されているし、Moll 及び Roxana は、夫々、最初の境遇は異つてはいたが、失張り同じように社会から outcast されて生きる運命におかれる。それでは先づ Moll を取り上げて、どのような性格と考えを持ち、何を目標にしてどのように生きていつたかについて眺めてみたいと思う。Moll は Newgate に生れ、娼婦生活 12 年、5 度結婚（その中 1 度は実兄と結婚）、盗賊生活 12 年、その後、Virginia で流刑生活 8 年を送つて余生を念願の gentlewoman として一生を送ることになつている。これは、いわば社会から棄てられた一女性の苦闘の一代記である。Moll は天涯孤独の身であつて 3 才の頃にある教会の情深い牧師に拾われ育てられるが、8 才の頃にその土地の市長宅の小間使に出される。しか

かし市長の二人の息子から求愛され、兄の Robin と関係を保ちながら、弟と結婚することになる。この結婚生活の失敗が Moll の人生を狂わし、悲惨な当てもない流浪の生活が始まる。夫の死后、再び孤独になつた Moll の心をかすめるものは何であろうか。Moll の次の告白が将来の運命を暗示するかのよう読者の胸にきさみつけられる。

'When a woman is thus left desolate and void of counsel, she is just like a bag of money or jewel dropt on the high-way, which is a prey to the next comer.'<sup>(19)</sup>

即ち、金もなくすてられた女は「路上におとされた財布か宝石」同然の運命におかれる。Moll は物心ついた頃から gentlewoman になることを生涯の目標にしている。だが彼女にとって致命的なことは beauty という武器以外に何物も持つていないのである。Moll はこの beauty から生ずる vanity と、poverty からの fear から、必然的に Moral な道からそれて行く。彼女が Robin の弟と結婚するのも、ある水夫と関係を持つのも、Bath で知り合つた男と同棲するのも又、富裕な banker と結婚するのも皆すべて poverty からのがれて生活の安定を得たいという切実な願いに外ならない。最初彼女が市長の息子に心を引かれる動機 of 如きものは

'I was more confounded with the money than I was before with the love; and began to be so elevated, than I scarce knew the ground I stood on...'<sup>(20)</sup>

と言つているように明白に愛情面にあるのではなく金銭面にあるのである。つまり Moll が相手とした男性は約 20 名でその殆んどは一種の取引のような関係にある。その最も明白な例は、Moll が妻子のある banker から求愛されるが、偶々、下宿の女主人の従弟が Lancashire に居て相当の資産家であると

聞いて、その両者を天秤にかけて、bankerより資産のある男と結婚しようとするのも金銭に保証された豊かな生活を期待したためである。結局、その男に置手紙をして家を出るが、この時のMollの驚きとその仕草は如何に彼女が明日への生活の不安におびえているかを最も端的に教えている。

'Nothing that ever befell me in my life, sunk so deep into my heart as this farewell; I reproached him a thousand times in my thoughts for leaving me; for I would have gone with him through the world, if I had begged my bread. I felt in my pocket, and there I found ten guineas, his gold watch, and too little things, one a small diamond ring, worth only about six l., and the other a plain gold ring I sat down and looked upon these things two hours together and scarce spoke a word, ...'<sup>[21]</sup>

Mollは無意識の中に手をポケットに入れ、残された全財産を金銭に換算している。いかにかMollのおかれたsocietyが厳しいものであるかが理解されるであろう。この告白の中には、なるほどMollの夫に対する深い愛情が露呈されている。しかしその愛情は直ちに金銭面、物質面に移行している。これは又Mollのrealisticな性格の一面をよく表わしたものと言えよう。

さて、Mollは再び孤独になり結局もとのBankerと生活を共にするが、この生活も短い期間ではあるが、Mollの心に或る程度の安らぎを与えているようである。その時の落ついた心中を次のように言っている。

'I lived with this husband in the utmost tranquillity: he was a quiet, sensible, sober man; virtuous, modest, sincere, and

in his business diligent and just; his business was in a narrow compass, and his income sufficient to a plentiful way of living in the ordinary way.'

[22]

だがこのeasyでcontentな生活も夫の急死によつて僅か5年しか続かなかつた。かくしてMollは48才にしてtheftの生活に転落していく。

しかしながら、DefoeはこのimmoralなMollの生き方を読者にconvinceせんがために、immoralな行為の直後に必ず、その不可避なmotiveに対する説明を試みている。つまり、povertyというnecessityによるimmoralityを強調するのである。この物語の随所に散見される'As covetousness is the root of all evil, so poverty is the worst of all snares.'<sup>[23]</sup>とか、'As poverty brought me in, so avarice kept me in, till there was no going back; as to the arguments which my reason dictated for persuading me to lay down, avarice slept in and said, go on, you have had very good luck, go on till you have gotten four or five hundred pounds, and then you shall leave off, and then you may live easy without working at all.'<sup>[24]</sup>

などの告白を重ねることにより読者に共感と同情を引くように努め、更にこうした社会に存在する悪に対して批判の目を向けさせようと説得するMollの、したがつて、Defoeの意図が感じとられる。

Mollにとつてimmoralityからの脱出はmoneyの蓄積によるpovertyの否定以外に道がない。かくしてMollが人を見る時物を見る時には必ずmoneyにおきかえて

その価値の大小を判断して行動する monetary world の人間になつており、最も 18 世紀的な人間像になつている。実際、  
'Money, not my virtue kept me honest.'<sup>[25]</sup> とか 'The money was the thing;... the money was always agreeable.'<sup>[24]</sup> とか或は、ある suitor から言い寄られた時、その恋文の中の言葉 'Virtue alone is an estate.' に対して 'But money's virtue, gold is fate.'<sup>[27]</sup> と Moll が返事を与えたり、beauty, birth breeding, wit, sense, manners, modesty, virtue 等も価値がなくて、  
'If a woman has not money, she's nobody;... nothing but money now recommends a woman.'<sup>[26]</sup> と言つているが money の所有が何よりも将来の happiness を約束するものであり、gentlewoman になる唯一の solid で hard な踏み台であり、且つ virtue を保持し、そして moral な生活への絶対的な保証となるという結論が出て来る。この money の獲得の前にはいかなる手段方法を取つても vice にはならず、moneyこそが virtue を導き出す最も重要な因子であり、しかも上述のように Moll の観点からして、money=virtue という等式を読者に convince する自信を Defoe は充分持つていた。即ち、彼はすでに 1709 年 6 月 23 日の 'The Review' 紙において、money の重要性を説き、これが人間のすべての活動の根源をなしている<sup>[29]</sup> と纏々述べて money の持つ偉大な支配力を充分に読者に伝えているのである。又、1711 年 6 月 5 日号<sup>[30]</sup> では、'The man is not rich because he is honest, but he is honest because he is rich' と述べ、続いて、'Men rob for bread, women whore for bread, necessity is the parent of crime.' と論じているので 'Moll Flanders' を読む者は殆んど、Moll の生き方に肯定的反応を示したことであろう。

そして、Defoe は日頃から、社会におけるあらゆる事象に対して抱いていた自己の思想と意見を小説 - 'Moll Flanders,' 'Roxana' - の虚構の世界で形象化して見せたに外ならないのである。したがつて Woolf が Defoe の hero と heroine が 'the world to begin' をもち、同時に 'the battle to fight for himself' と言つている時の the world とは、抬頭しつつあつた middle-class の money 万能時代の世界であり、したがつて money=virtue なる倫理が支配していた世界であると言つても差支えないと思う。更に 'the battle to fight for himself(or herself)' とは poverty の苦痛から脱出するための money の追求を意味するものと考えてよいだろう。

Woolf は Moll の money 追求への執拗な、そして飽くことのない avarice の中に 'a woman on her own account' を発見しようとし、そうした女性に最大の魅力を感じたと言つてよいだろう。

#### IV

以上述べた来た Woolf の問題とした Moll の人間像は勿論 Roxana のそれと密接な関連がある。それでは 'Roxana' における heroine の Roxana は如何なる人間像になつているのであろうか。Moll との関連において捕えてみたいと思う。

Roxana はこの小説の副題 'A History of the Life and Vast Variety of Fortunes of Mademoiselle Bebeau, afterwards call'd the Countess de Wintzelsheim, in Germany. Being the Person Known by the name of the Lady Roxana, in the Time of King Charles II' が教えてくれるようにフランスの名門の出であつて、1683 年に宗教上の理由(プロテスタントの迫害をのかれるため)<sup>[31]</sup> で両親に伴われて England に渡つてくる。そして 15 才の時に 25000 livres

(2000ポンド)という多額の持参金をもつてある brewer (醸酒業者)の息子と結婚することになる。つまり Moll とは反対に high class とまでゆかないが、可成り富裕な家庭の令嬢なのである。しかし最初の夫 (a brewer's son) との結婚が失敗に終ると生活の不安からある landlord の世話になるが Moll と同様に whore の世界に入り, jeweller, Prince, Dutch merchant 等々男から男へと渡り歩く。しかし Moll が身分的に低い男と関係をもつたのに比し, Roxana は vanity が強いので自分と同等か或は自分以上の身分の, しかも財産の多い男と関係をもつ傾向がある。前述したように Roxana の場合も whore になる理由は poor life から脱出である。'Poverty was my snare; dreadful poverty!'<sup>152</sup> とか或は

'As necessity first debauched me, and poverty made me a whore at the beginning, so excess of avarice for getting money, and excess of vanity, continued me in the crime, not being able to resist the flatteries of great persons.'<sup>153</sup>

などの感想で分かるように Roxana の生き方は大体 Moll のそれと共通していることが分かる。

しかしながら, 前述のように虚栄心と avarice が Moll より一層強く, そのため常に high class の gentlewoman になろうと心掛けている。つまり Roxana は Moll より intellectual な女性なのである。

そして常に結婚の問題に強い関心を寄せている。この点, Moll の場合は, 'A woman should never be kept for a mistress, that had money to make herself a wife.'<sup>154</sup> と言っているだけで結婚についての明確な意見を持っていない。Moll の考えは金のある女性は mistress として用はれ

るべきではないという事で, 逆に言えば, 金がなければ mistress になるのもやむをえないという消極的な意見にすぎないのである。この点を Roxana の意見と比較して見ると, 彼女は金の有無よりはむしろ 'liberty' の確保との関連において明白なしかも極めて積極的な考えをもっている。

Roxana は妻ではあるが, 妾を礼讃する点で思想的に Moll と大きな差異がある。例えば Roxana がパリーで実直で資産のあるオランダの商人と知合いになり求婚されるが, その商人から 'Come, my dear, you are the first woman in the world that ever lay with a man and then refused to marry him.'<sup>155</sup> とされるように同衾はするが matrimony を拒否する場面がある。この時彼女は 'it was upon the account of my money that I refused him; and that though I could give up my virtue, and expose myself, yet I would not give up my money, ...'<sup>156</sup> と告白している。つまり, money を失いたくないという単純だが, 彼女にとつては極めて重大な理由によるのである。(なぜならば多額の持参金をもつて最初に結婚した相手の夫が fool であつたために, 無一文になつて whore となつたのであるから) しかしながら, その商人と結婚について話し合ひにつれて, Roxana は次のような新しい考えを被遷するに至る。

'A wife is treated with indifference, a mistress with a strong passion; a wife is looked upon as but an upper servant, a mistress is a sovereign; a wife must give up all she has, have every reserve she makes for herself be thought hard of, and be upbraided with her very pin-money; whereas a mistress makes the saying true, that what the

man has is hers, and what she has is her own; the wife bears a thousand insults, and is forced to sit still and bear it, or part, and be undone; a mistress insulted helps herself immediately, and takes another.<sup>137</sup>

まさに堂々たる自己辯護のための新しい理論である。矢張り、こうした意見を持つ点で Roxana は intellectual で新しいタイプの女性である。Woolf もこの問題に興味を感じたらしく、Moll がただ、「勇気こそ女の必要なものでありそして女としての立場を保つことの出来る力である」と言っているに過ぎないのに、

'Roxana, a lady of the same profession, argues more subtly against the slavery of marriage.'<sup>138</sup>

と Roxana の考えの進歩性を認めている。そして Defoe が Moll と、Roxana の口を通して女性の権利の尊さを語らせ、読者の共鳴を引くように、特異な hardships が展開される境遇に二人を置いたことは明白である<sup>139</sup>と断定している。Brian Fitzgerald も Defoe のこの「女性の権利と教育」に関する資料を詳細に調べ、且つその当時の女性の生活態度及び社会における存在理由を次のように述べている<sup>140</sup>が注目値する。

'In the seventeenth century, man's attitude to women was a romantic one, the Puritan regarding them as angels, the Cavalier as dolls. Women were allowed to possess no minds of their own, while their bodies were regarded as being the property of men. High-born ladies learnt from their mothers to read, write, sew, and manage the household. But they learnt nothing else.... The Tory squire and Whig merch-

ant were alike determined to keep the female sex in ignorance in order to keep their wives in due subjection. To bake and bear children for men - that and nothing else was demanded of women... And so things went on long after Defoe's day right through the eighteenth century and far into the nineteenth. Women were condemned to be the slaves of men...'

こうした当時の社会的病根である女性軽視の風潮に義憤を感じた Defoe は 'An Essay upon Projects' (1697) の中で、男女の権利の平等性を訴え、女性の解放の必要性を力説し、特に女性にも男性と同様に教育を受けさせるべきである<sup>141</sup>と述べている。そして Defoe はこの問題をこの Roxana の口をかりて読者の心に深く印象づけるよう考えたのであろう。Roxana にとつては a kept mistress になつたことに対する精一ばいの自己辯護だろうが Defoe にとつては女性の読者への真摯な appeal であつたと思われる。相手の merchant が 'She had started a new thing in the world; it was a way of arguing contrary to the general practise.'<sup>142</sup> とか、'the other way was the ordinary method that the world was guided by.'<sup>143</sup> のように反論するが、Roxana は 'I had, perhaps different notions of matrimony from what the received custom had given us of it; that I thought a woman was a free agent, as well as a man, and was born free, and could she manage herself suitably might enjoy that liberty to as much purpose as the men do;... a woman gave herself entirely away from herself, in marriage,...'<sup>143</sup> と



か、'the very nature of the marriage contract was, in short, nothing but giving up liberty, estate authority, and everything to the man, and the woman was indeed a mere woman, ever after, that is to say, a slave.'<sup>44</sup> 又は、'The presence of affection takes from a woman everything that can be called herself.'<sup>45</sup> と自分の主張をまげようとしない。Roxana は結婚という法的契約によつて愛情の伴わない生活をするのが自我という最も大切なものをすてるに等しいという Moll には考えられなかつた新しい感覚を身につけている。しかし Roxana にとつて最も失いたくないものは、「liberty', 'authority', 'self' よりもむしろ 'estate or money' ではなかつたろうか。いづれにしても彼女は自分の主張通り、mistress の状態を続け、金の追求に没頭していくのであるが可成り多額の財産をつくつた時も矢張り恐怖から逃れることが出来ない。その不安な気持を次のように述べている。'I was rich, very rich, and what to do with it I knew not, nor who to leave in trust. I knew not.... This gave me great uneasiness, and I knew not what to do; for I could not mention it to the prince, lest he should see that I was richer than he thought I was.'<sup>46</sup>

このように Roxana は prince に対してさえ、財産の額を打明けずに不安のままである。彼女がこの秘密を安心して打明けることが出来る相手は Sir Robert Clayon だけである。彼女は安心して秘密を語り、金融業者になる智恵をかり利殖することに決める。Defoe はこの段に来て、いかにも 18 世紀的な人間像を、換言すれば、あまりにも Defoe 的な理想像を創り出している。即ち Moll を 'a woman on her own account' とすれ

ば Roxana は正に 'A tradeswoman on her own account' なのである。Moll の場合は、'I was not averse to a tradesman, but then I would have a tradesman, forsooth, that was something of a gentleman too;...'<sup>47</sup> としか述べていない。tradesman に対して消極的な愛着しか感じておらず、Defoe の理想像にはまだ相当の距りがあつた。Roxana と Sir Robert Clayon との間で行われた会話

'Sir Robert said, and I found it to be true, that a true-bred merchant is the best gentleman in the world; that in knowledge, in manners, in judgment of things the merchant outdid many of the nobility; that having once mastered the world, and being above the demand of business, though no real estate, they were then superior to most gentlemen, even in estate;... That an estate is a pond; but that a trade was a spring;.....'<sup>48</sup>

と、1713年1月8日号の 'The Review' 紙<sup>49</sup> 上の Trade 論と比較してみると、殆んど同じ主旨であつて Defoe がいかに Trade の重要性と Tradesman を高く評価しているか理解される。以上の説明で分るように Roxana は Moll より、新しい世界に生きる intellectual sense を充分備えており、'A tradeswoman on her own account' として、言い換えれば dissenter としての筋金の通つた、avaricious な人間像となつているのである。

## V

Woolf は Defoe の小説家としての偉大な点を少くとも二つ指摘している。即ち、Defoe が 'the passing and trivial

side of things. でなく 'the important and lasting side of things' を取扱っていることと, Defoe の 'Moll Flanders' と 'Roxana' の小説が 'a knowledge of what is most persistent, though not most seductive, in human nature' に上に基づいて創り出されていることの二点である。つまり Defoe は現象面だけをとらえるのではなく, その現象のうらに存在する本質的なもの, 永続的なもの, 或は, 法則的なものを鋭敏なる観察力と洞察力とをもつて描き出しているのである。今まで見て来たように, Moll は孤独で文なしの境遇から gentlewoman になるために, 常に lusty な目を見開いて貧慾に money を追求する energetic な姿勢をくずさない。harsh な現実に対する Moll の practical な知識を縦横に用いる robust な生き方に Woolf は Defoe の分身を発見し, 温かい共感を寄せているのである。又, Roxana も金を執拗に追求するが Moll のように Poverty からの脱出という単純な動機でなく, 自我を抑圧されない liberty の境地を求める新しい型の女性として描かれている。彼女が wife でなく kept mistress として生き, 金利業者として飽くなきまでに富を求めるのも自我の充足にほかならない。Woolf はこのようにたえず生活の安定と幸福を願つて富の蓄積に示される限りない energy と烈しい生命力を 'A woman on her own account' としての Moll の中にそして 'a tradeswoman on her own account' としての Roxana の中にそして又作者 Defoe の中に発見したのである。

(註)

- (1) Leslie Stephen: Hours in a Library(1892) Vol.I, P.43,
- (2) ibid., P.10.
- (3) Arnold Kettle: An Introduction to the English Novel(1954) P.60.
- (4) English Critical Essays(20 th Century 2 nd Series)で Daniel Defoe を論じている。
- (5) Virginia Woolf: The Common Reader (1 st Series)(1951) P.122.
- (6) ibid
- (7) The Best of Defoe's Review (ed by Payne)(1951) PP.51-52.
- (8) Brian Fitzgerald.: Daniel Defoe A Study in Conflict (1954)P.156.
- (9) ibid
- (10) The Best of Defoe's Review, PP. 252-254.
- (11) ibid., PP.235-239.
- (12) ibid., PP.232-235.
- (13) ibid., PP.229-232.
- (14) Brian Fitz Gerald, op. cit. P. 137.
- (15) The Best of Defoe's Review(ed. by Payne) P.51.
- (16) Virginia Woolf: op. cit.P.123.
- (17) ibid., P.124.
- (18) ibid.
- (19) Moll Flanders, P.101.
- (20) ibid., P.15.
- (21) ibid., P.122.
- (22) ibid., P.152.
- (23) ibid., P.189.
- (24) ibid., PP.164-165
- (25) ibid., P.45.
- (26) ibid., P.51.
- (27) ibid., P.60.
- (28) ibid., P.12.
- (29) The Best of Defoe's Review, PP. 131-133

- (30) *ibid.*, PP.269-271
- (40) 内多 毅著：イギリス小説の社会的成立  
P.153.
- (50) *Roxana*, P.31.
- (6) *ibid.*, P.78
- (34) *Moll Flanders*, P.45.
- (35) *Roxana*, P.127.
- (36) *ibid.*, P.128.
- (37) *ibid.*, PP.114-115
- (38) Virginia Woolf, *op. cit.* P.128.
- (39) *ibid.*
- (40) Brian Fitzgerald, *op. cit.* P.  
98.
- (41) *ibid.*, PP.99-102.
- (52) *Roxana*, P.130.
- (43) *ibid.*, PP.128-129
- (44) *ibid.*
- (45) *ibid.*, P.130.
- (46) *ibid.*, P.86.
- (47) *Moll Flanders*, P.45.
- (48) *Roxana*, PP.148-149.
- (49) *The Best of Defoe's Review*, P.  
114, P.124. 特<sup>に</sup> P.124 の *tradesman*  
については下記の通りである。

'If we respect trade, as it is understood by merchandising, it is certainly the most noble, most instructive, and improving of any way of life. The artificers or handicraftsmen are indeed slaves; the gentlemen are the plowmen of the nation, but the merchant is the support and improver of power, learning, and fortunes. A true-bred merchant is a universal scholar, his learning excels the mere scholar in greek and Latin as much as that does the illiterate person that cannot write or read....'

(50) V. Woolf, *op. cit.* p.131.

( *Roxana* と *Moll Flanders* の text )  
は Bohn's Library を使用した。